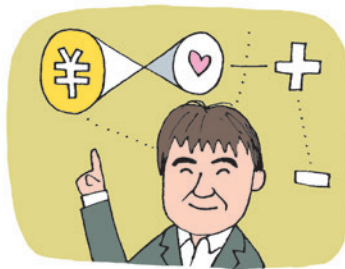


愛はお金に勝るか——。そう問うと、半数以上の人は「そう思う」と同意します。愛は人間性の象徴であり、絶対的な自己犠牲を伴うため、どんなお金にも換えられない価値があるということなのでしょう。ところが、話はそう簡単ではありません。「お金は愛に勝るか」という逆の質問をしても、やはり過半数から「そう思う」という同意が得られるからです。

矛盾する調査結果ですが、ここには「利用可能性ヒューリスティック」と呼ばれる心理が通底しています。脳の判断は思い出しやすさに影響されるという心理です。脳裏に浮かびやすい情報は「これほど簡単に実例が思い出せるのだから、その通りだろう」と確信が強められます。先の二つの質問はどちらも「あるある」「言われてみればたしかに」と、具体例が容易に思い当たります。ですから、どちらの質問も「正しい」と賛同を得やすいのです。

しかし、一見矛盾した調査結果の原因は、利用可能性ヒューリスティックだけではありません。そもそもお金と愛は独立した関係ではないからです。数学的に表現すれば「愛とお金の両軸は直交しない」となります。愛があることでお金が生まれることもありますし（例：愛に支えられることで仕事に精が出る）、お金があることで愛が生まれることもあります（例：デートに誘うには通常は幾分かのお金が必要です）。

こうした愛とお金の関係は、より一般的な議論として、幸せとお金の関係へと拡張することも



絵・江口修平

お金、愛、しあわせ

池谷裕二

きます。なぜなら年収額が高いほうが当人の「幸福感」が強まる傾向があるからです。お金は生活を豊かにするのみならず、人の心をも豊かにするのです。

ここで疑問が生じます。お金と幸福感はどこまで比例するのでしょうか。パデュー大学のアンドリュー・ジェブ氏が、本年一月の『ネイチャー人間科学』誌に発表した論文で、一つの回答を与えています。著者らは「ギャラップワールドポール（世界世論調査）」に着目することで、お金と幸福感の世界的な傾向を調査しました。ギャラップワールドポールとは、報道の自由、安全、政権の支持率、幸福、仕事など、人々の生活に影響する一〇〇個の項目についてアンケート調査した大規模なデータベースです。

ジェブ氏らが一六四カ国における一七〇万人のデータを慎重に分析したところ、たしかに幸福度は収入額とともに増すものの、無制限に増幅するわけではなく、年収にして八〇〇万円ではほぼ増えなくなるのがわかりました。もちろん国や地域によって異なり、富める国ほどその金額は高まる傾向がありました。地域によってはその金額を超えると、かえって幸福度が下がることもわかりました。新たな欲が芽生えることで人生への不満が生じるようです。

なるほど、自分なりによい塩梅や目標を見つけ、おくことが、人生を満足に過ごすためには大切なようです。

いけがや・ゆうじ●1970年生まれ。98年に東京大学にて薬学博士号を取得。2002～05年にコロンビア大学（米ニューヨーク）への留学をはさみ、2014年より現職（東京大学薬学部教授）。専門分野は大脳生理学。とくに海馬の研究を通じて、脳の健康について探究している。文部科学大臣表彰 若手科学者賞（08年）、日本学術振興会賞（13年）、日本学士院学術奨励賞（13年）などを受賞。著書に『海馬』『記憶力を強くする』『進化しすぎた脳』などがある。

